

日中翻訳

——「天声人語」(2014.2.26)の中国語訳について

続 三 義

キーワード：日中翻訳，天声人語，語彙，受身表現

これまでも『朝日新聞』のコラム「天声人語」の中国語訳についていろいろと論じてきた。今回は、朝日新聞中文網に掲載されていた「『図書館の自由』を守れ」という「天声人語」(2014.2.26)の中国語訳(2014年5月5日掲載、以下「訳文」とする)に分析を加え、日中言語対照研究の角度から、検討を加えたものである。

本稿では、“方形”、“空白”、“无疑”、“甚至”などの単語、“此即为‘柏林焚书’事件”、“记录下当年书籍蒙难的记忆”、“在焚书的地点上”、“建立起”、“一座奇特的空间”、“一件事”、“遭到破坏”、“被撕毁”、“这份深不可测的恶意”、“如此事件”、“无论其背后到底有着何种原因”、“深刻的影响”、“焚书之举背后”などの連語・フレーズ、そして、“被认定”、“被付之一炬”、“受到广泛阅读”などの受身というヴォイスに関する表現などを分析する。皆さまのご参考になればと願うものである。

(1) “方形”

論述しやすくするため、原文の第1段落と「訳文」を引用しておく。

詩人の長田弘(おさだひろし)さんに「ベルリンの本のない図書館」という作品がある。上からのぞき込むしかないその場所は〈誰も入れない、地下の、方形の部屋の、／四面はぜんぶ真っ白な本棚で、／本棚に本は一冊もない。〉

詩人長田弘有一篇作品、名为《柏林的无书图书馆》。这个只能从上面俯瞰的空间，是

一间“谁都进不去的方形地下房间／四面尽是空白的书架／一本书都没有”。

ここで、2つの言葉を検討する。

まず、原文の「方形」について。原則から言えば、「方形」を中国語の“方形”(『日中辞典』、講談社。以下『日中』とする。)と訳しても、意味的には問題はない。しかし、中国語の“方形”は、少なくとも《现代汉语词典》(第六版。商務印書館。以下《现汉》とする。)にも載っていない言葉である。日本語の「方形」は『岩波国語辞典』(第七版。岩波書店。以下『岩波』とする。)にも載っていて、割と普通に使われる言葉と理解できる。対して、中国語では、“四方的”または“四四方方的”と訳せば、一つは、普通の言葉であり、もう一つは、文学的にも「生き生きした表現」になる。

それから、原文は、「地下の、方形の部屋」として、まずこの部屋は地下にあることを強調している。中国語としては、“方形地下房间”と訳すと、詩人が強調しようとする「地下」のニュアンスが薄くなる恐れがある。やはり、少なくとも“地下的、方形房间”と訳した方がよからう。

(2) “空白”

次に、日本語の「真っ白な」の「訳文」を見よう。この語も難しい言葉ではない。これはあくまでも色について言っているのに、中国語の“空白”はこれに対する同義語の日本語もあるように、「空白」という、空間の意味を表

す言葉である。これは簡単な誤解と言えらう。

日本語は、「四面はぜんぶ真っ白な本棚で、／本棚に本は一冊もない」として、まず本棚の色を言って、そしてその本棚の状態を言っている。「本は一冊もない」。しかし、「訳文」を見ていると、“四面尽是空白的书架／一本书都没有”となっていて、色のことは出ていない。そして、“四面尽是空白的书架／一本书都没有”「四面はぜんぶ空白な（空っぽの）本棚で、／本は一冊もない」と、「空白な（空っぽの）本棚」と「本は一冊もない」は意味的に重複している。このような問題は、翻訳の際はもとより、普通、文章を書く時でも気を付けるべきことである。

(3) “被认定”, “被付之一炬”

論述しやすくするため、原文の第2段落と「訳文」を引用しておく。

図書館は実在する。1933年5月10日、ナチスは2万冊以上という書物を燃やした。非ドイツ的、退廃的などとみなしたマルクス、フロイト、ハイネ、ブレヒトらの著作を灰にした。「焚書（ふんしょ）」である。その現場に、本の受難の記憶をとどめるための不思議な空間がつくられた

这是一间真实存在的图书馆。1933年5月10日，纳粹焚烧了2万多册书籍。被认定为非德意志的、颓废的马克思、弗洛伊德、海涅、布莱希特等人的著作全都被付之一炬，此即为“柏林焚书”事件。为记录下当年书籍蒙难的记忆，在焚书的地点上建立起了这样一座奇特的空间。

ここで、原文の他動詞表現と「訳文」の受身表現について検討したいと思う。

この段落では、原文は他動詞となっているところを、「訳文」では、いずれも受け身の形で表現している。「～とみなした」と「灰にした」である。この二か所は、「訳文」では、“被认定”と“被付之一炬”と訳している。前者は「認められた」という意味で、そして、後者は「荼毘

に付された」という意味である。意味的には、この2語も中国語としては、それほど違和感はないように思う。

しかし、日本語は普通「なる型言語」と言われている。対して中国語は「する型言語」と言われている。そういう意味では、中国語で「する型表現」の言葉は、日本語で表現するときに、「なる型表現」になるのが普通ということになる。逆に言えば、日本語の「なる型表現」も中国語では「する型表現」になるのに、日本語の中でも「する型表現」となっているものは、どうして中国語では「なる型表現」になっているのだろう。

「なる型表現」は、普通動作の仕手を明記しないことで、仕手の責任逃れと言われている。「天声人語」の作者は、ここでは、あくまでもナチスの仕業と決めつけて述べている。仕手の責任をはっきりさせている。しかし、中国語を読んでも、ここの表現は「なる型表現」になっている。もちろん、文の主語からすれば、ここの主語は“著作”なので、受身表現を使ってもいいことになる。しかし、受身表現を使ったところ、責任はやはりぼやけてしまう恐れがある。しいて言えば、中国語では、“著作”が主語になるので、それが“被付之一炬”と表現されても許されるだろう。ここで、それと認定する仕手が重要なのか、著作を灰にする仕手が重要なのか、異論があるかもしれない。しかし、歴史的な事実としても、書物の認定が先決なので、だれが認定したかが表現できていれば、あとの「灰にする」は事実を述べるだけで、責任が特に明確にしなくても、中国語では、いいかもしれない。

他们所谓的非德意志的、颓废的马克思、弗洛伊德、海涅、布莱希特等人的著作全被付之一炬／都化为灰烬。

(4) “此即为‘柏林焚书’事件”

この文は、中国語の表現の問題である。というのは、中国語の“即”と“为”はほとんど同

じ意味である。普通“A即B”と“A为B”は、どちらも「AはBである」という意味を表すことができる。したがって、ここの“即为”という表現は、意味の重複ということになる。“此即‘柏林焚书’事件”でも“此为‘柏林焚书’事件”でも中国語としては通じることになる。なお、ここの“事件”という語もちょっと蛇足的な感じがする。なくても十分である。つまり、“此即‘柏林焚书’”としても全然問題がない。

(5) “记录下当年书籍蒙难的记忆”

この文も、中国語の表現の問題である。少なくとも“记录下～记忆”という中国語の表現には問題がある。「記憶を記録する」という表現は、原文とはかなりの隔たりがある。

「とどめる」に関しては、『日中』では、次のように釈義している（関係意味項目だけ挙げることにする。句読点など、記号を変更することがある。以下同）。

2. [残す] 留下；保留；遗留。

これだけでもわかるように、「記憶をとどめる」はここでは大体“留下；保留”という意味でよい。

ほかの言い方では、「記憶をとどめる」はすなわち「(この事件を)銘記する」、または「忘れないようにする」と同義だろう。「(この事件を)銘記するため」なら、“为了铭记这一事件”と表現すればいいし、「忘れないようにするため」なら、“为了不忘记这一事件”でいい。

この短い文には、もう1つの言葉がある。“当年”である。これは、原文にない言葉である。

中国語の“当年”は、『中日大辞典』（大修館・第三版。以下『中日大』とする。）では、次のように釈義している。

① 当時。あの時。あの年。往時。

この意味から見れば、もし、この「訳文」を日本語に戻すなら、次のようになる。

「当時の本の受難の～」となる。結論から言えば、「当時の～」云々はここでは蛇足であり、全くいらぬ言葉である。

(6) “在焚书的地点上”

“在焚书的地点上建立起了这样一座奇特的空间”

この文には、3か所、中国語の表現の問題があると考えられる。

まず、中国語の場所詞の使い方である。“在焚书的地点上”の使い方の中で、“在焚书的地点”だけで充分である。ここでは、“地点”という場所詞でも十分なので、いわゆる方位詞の“上”の出番はない。さらに、実際の図書館は、地上ではなく、地下なので、“地点上”という言い方は表現的にも、すっきりしないことになる。

(7) “建立起”

次に、上と関連性があると考えられる。動詞の“建立起”の表現である。「訳文」では、方位詞“上”を使っているから、ある空間の“上”だから、動詞“建立”だけではいささか物足りない、訳者が感じ付き、空間的に上へ向く意味の趨向動詞“起”を用いて、その意味を表そうとしているようである。しかし、「天声人語」でも明らかにしているように、この図書館は、地上にあるのではなく、地下にあるのである。したがって、ここに上へ向くという意味の趨向動詞の“起”の使い方は問題である。さらに、中国語の動詞“建立”自体にも、“立”という漢字が表しているイメージは上へ向いているものである。したがって、“建立”という動詞を使っても、問題があると考えられる。そのうえ、さらに“起”を付け加えるということは、現実のイメージと逆の方向になっているのである。“立”も“起”も上へ向く動作なので、ここではいずれも不適切である。ここでは“建造”で十分である。

(8) “一座奇特的空间”

ここは、中国語の数量詞の使い方の問題である。

中国語の量詞の“座”は普通建物などを数えるのに用いられる。「山」などを数えるのにも

用いられるが、普通その建物がやはり立体性があり、しかも上へ向いているという特性がある。下への広がりのある建物には、あまり用いられない。秦の始皇帝や明の十三陵の地下宮殿のような建物は、“座”などで数えることができる。しかし、ここの図書館は、地下への広がりイメージである。それでももし“一座”が限定しているのは“空間”ではなく、“图书馆”であれば、“座”を使うことができる。しかし、ここでは普通名詞の“图书馆”ではなく、抽象名詞の“空間”である。“空間”とは、抽象的な空間、つまり漠然的な場所の表現なので、“座”で表すことができない。ごく普通の量詞の“个”を使えば無難である。

(9) “一件事”

論述をしやすくするため、原文の第3段落目と「訳文」を引用しておく。

あのナチスの暴挙を思い起こす、という反応が出るのも不思議ではない。『アンネの日記』やそれにかかわる書籍が、次々と破られている。都内のあちこちの図書館で被害にあったのは300冊以上という。底知れぬ悪意が感じられ、戦慄(せんりつ)する

最近东京发生的一件事也不准让人联想起当年纳粹的暴行。《安妮日记》及有关书籍相继遭到破坏。东京都内多家图书馆里共计300多册书籍被撕毁。这份深不可测的恶意令人战栗。

「訳文」の“最近东京发生的一件事”「最近東京で起こったある出来事は～」は、「天声人語」の原文にない言葉である。意味的には、訳文にこのような文言を入れること自身はそれほど問題がない。しかし、ここの“一件事”という表現には問題がある。すぐ下の文言で分かるように、東京で起こっていることは、「次々と」あるからである。この「次々と」あることは、“一件事”ではなく、まず“一系列”のことであり、しかも、ただのことではなく、ここでは「事件」

のことである。したがって、もし訳文でこの背景を述べるなら、“事”ではなく、“事件”という言葉を使うべきである。ここでは“一系列事件”と表現すればいい。

(10) “遭到破坏”, “被撕毁”

“遭到破坏”は、原文の「破られている」という言葉である。「破る」という動詞を見てみると、中国人は、往々にしてこの動詞の漢字表記の「破」にこだわり、結局、“破坏”と理解してしまう。中国語の“破坏”に対して、日本語にも「破壊」という動詞があり、この2語は同義語と考えられる。しかし、日本語の原文では、「破壊」という言葉は使われていない。というのは、日本語の「破る」という語は、「破」という漢字を用いているものの、意味的には限定されている。『岩波』では次のように釈義と用例を挙げている。

①まとまった形のもの(の一部)を壊して全体をだめにする。「敵の囲いをー」「平和をー」「静けさをーサイレンの音」。裂く。「障子をー」。割る。「卵のからをーってひなが首を出す」②抵抗になるものを突き抜ける。③押しよけて進む。「法律をー」「世界記録をー(=更新する)」「迷いをー」④勝負で相手を負かす。「横綱をー」

これに対して、『日中』では、次のように中国語訳を当てている。

1〔引き裂く〕撕破; 撕毁; 弄破。2〔壊す〕破坏; 弄坏; 打碎。3〔規則・約束などを犯す〕违反; 违背; ; 失约。4〔相手を負かす〕击败; 挫败。5〔安定していた状態を乱す〕打破。6〔突破する〕冲破; 越过。

『日中』の意味項目が多いようだが、中国語訳を考えての釈義である。基本的には、『岩波』の①の意味が基本義である。『日中』の1の項目には、“撕破; 撕毁; 弄破”の3語が挙げられているが、ここで述べている、「破る」の目的語は書籍なので、中国語訳としては“撕破”だけでいい。「訳文」では、下の“被害にあった”

のところで、“撕毀”という語を使っているが、“撕毀”に関しては、《現漢》では次のように釈義している。

①撕破毀掉。②单方面背弃共同商定的协议，条约等。

これについて、『中日辞典』（講談社。以下『中日』とする。）では次のように釈義している。

①引き裂く。破る。②破棄する。反故にする。

“撕毀”に関する《現漢》の説明は、この語の構成から説明している。つまり“撕”と“毀”の両方を説明しているのである。というのは、“撕毀”の語構成の重点は、二音節目の結果補語の“毀”にある。もの全体の意味、機能などがだめになるという意味において使われている。書籍に関しては、あくまでもその一部がだめになるという意味で、ここで「破る」という語がつかわれているのであって、書籍全体が機能しなくなる、だめになるという意味ではない。実際、事件としては、『アンネの日記』という書物は詳しいことは知らないが、関係のページが破られているようである。原文では「破られている」と受け身の形で表現されている。日本語の受身は中国語では、大体“被”で表現するところが多い。ここでは“被撕”だけでもいい。

《安妮日记》及相关书籍接连被撕。

そして、下の“被害にあった”に当たる「訳文」は“被撕毀”と思われるが、前述のように、「破られる」のところでは、“被撕毀”を使わず、“遭到破坏”を使っていたので、ここでその具体的な動作を表す言葉を当てるとということ自身は、問題ない。それでも、まず“撕毀”の意味の妥当性から考える場合、不適切であること、そして、抽象的な「被害にあった」に対して、具体的な“撕毀”を当てるとのにも、問題があったように感じられる。

(11) “这份深不可测的恶意”

ここでは、この量詞“份”についてちょっと触れてみたい。《現漢》では、次のように釈

義している。

①整体里的一部分。②量 a) 用于搭配成组的東西。b) 用于报刊、文件等。③用在“省、县、年、月”后面，表示划分的单位。

『中日』も『中日大』も、具体的な記述は省略するが、わりと詳しく例を挙げながら釈義している。しかし、例えば『中日』では、“一份礼物”を挙げて、「組や揃いになっているものを数える」意を説明しているが、ここの「訳文」の気持ちの数え方としての用法は、どの辞書も挙げられていない。実際、この“份”は気持ちを表す用法もある。例えば、“一份情谊”、“一份深情厚谊”などのような使い方である。これらの用例を見れば、“份”はおおよそいい意味のものに用いられる。けれども、ここの“这份深不可测的恶意”と“恶意”「恶意」の修飾語としては、やはり首をかしげたくなる。ここでは、この量詞を用いず数詞“一”だけ使って、“这一深不可测的恶意”とすれば、問題ないだろう。言葉の褒貶意は非常に大事である。

さらに、“这一深不可测的恶意”のような、“深不可测的恶意”という言い方は中国語としてはやはりちょっと違和感のある言葉である。原文の意味を汲むのには、これでもいいかもしれないが、中国語の四字成語“居心叵测”を活用して、“叵测居心”と訳せば、より良いように考えられる。

(12) “受到广泛阅读”

論述をしやすくするため、原文の4段落目と「訳文」を引用しておく。

ユダヤ人少女アンネ・フランクの日記は日本でも長く広く読み継がれてきた。第二次大戦中、迫害を逃れ、オランダで暮らした日々の記録は「世界記憶遺産」だ。人類が後世に伝えるべき史料としてフランスの人権宣言などと並ぶ

长期以来，犹太少女安妮·弗兰克的日记在日本也受到广泛阅读。第二次世界大战中为逃避迫害而藏身荷兰的生活记录无疑是一份

“世界记忆遗产”。作为应当流传后世的史料，它甚至可与法国的人权宣言比肩。

これも、中国語の表現の問題である。原文は「広く読み継がれてきた」で確かに、ここは受け身である。日本語の受身は、最も簡単な中国語訳は、うえでも触れているように“被”という言葉を使えばいい。“被广泛阅读”なら、立派な中国語表現である。しかし、「訳文」では“被”を使わず、“受到”を使った。その理由はわからないが、結論から言えば、“受到广泛阅读”は中国語としてはよくない。中国語の“受到”は、基本的には、日本語の「受ける」と同義である。『大辞林』(三省堂)では、「受ける」について次のように釈義している。

- ①向かってくる物をとらえておさめる。
 ②風や光が当てられる。③自分に差し出されたものを自分のものとする。④(動作を表す語や、動作の結果生ずるものを目的語とする)他からの働きかけが及ぶことを、働きを及ぼされた側から言うことば。[[受]] ⑦課せられた物事やしかけられた行為などに積極的に対処する。⑧自分の意志に関係なく、他からの働きかけをこうむる。⑨他からもたらされた状態が自分の身に自然と生ずる。⑩自分からすすんで、あることをしてもらう。⑪他からの注文・依頼を承知して対処する。⑫(提案などを)承服する。受け入れる。のむ。⑬影響・関連・つながりがそこに及んでいる。⑭引き継ぐ。継承する。⑮観客・聴衆に気に入られ、好まれる。⑯(角角を表す語を目的語として)…に面する。⑰借金を払って、質種などを取り戻す。現代では「うけ出す」「うけ戻す」など、複合した形で用いる。

非常にたくさんの意味があるが基本的には、ほかからくる物、働きかけなどをこうむる、という意味合いである。この「他からの」というニュアンスがないものは、目的語にはならない。

「天声人語」の「広く読み継がれてきた」は、本が読まれるという意味だが、これは、別に本

が外から何かの働きかけを受けるわけではない。日本語でも、「広く閲読を受けている」とか、「読書を受けている」とかの表現はない。

中国語でも、“受到”の目的語になるものは、必ず何かの働きかけ性のものでなければならない。よく言われているのは、「批判」「表彰」「打撃」「影響」などの意の語が目的語としてはふさわしい。“阅读”“学习”などは絶対に“受到”の目的語にはならないのである。

でも、「広く読み継がれてきた」とは、多くの読者を持つ、または広い読者層を持つといった意味としても理解できるだろう。そういう意味では、この短文は“拥有/有着广泛的读者群”と表現してもよからう。

(13) “无疑”“甚至”

この段落の最後の2つの文は、原文に対して、「訳文」では、次のようになっている。再録しておく。

第二次世界大战中为逃避迫害而藏身荷兰的生活记录无疑是一份“世界记忆遗产”。作为应当流传后世的史料，它甚至可与法国的人权宣言比肩。

ここでみてみたいのは、この2つのセンテンスの中の「メタ語」としての“无疑”“甚至”である。

“无疑”は「疑いがない。相違ない」、 “甚至”は「**圖**…すら。…さえ。**圈**(二つ以上の並列成分の最後の1項の前に置いて)さらには。ひいては」(日本語訳は、いずれも『中日』)の意である。これらは、いずれも文自身が述べているものそのものではなく、話し手が、ある種の気持ちを伝えるために使った言葉である。これまでの文法用語でいえば、モダリティーのカテゴリーに属すだろうか。このような言葉は、メタ言語という学者がいる。ここでは、メタ言語という用語を用いて説明する。

「天声人語」の原文では、ただ、淡々と「第2次大戦中、迫害を逃れ、オランダで暮らした日々の記録は「世界記憶遺産」だ。人類が後世

に伝えるべき史料としてフランスの人権宣言などと並ぶ」と述べているのに、「訳文」は、この中に“无疑”と“甚至”を付け加えている。ここに、筆者の顔を出している。もしこの2語を入れると、前の文は、「第2次大戦中、迫害を逃れ、オランダで暮らした日々の記録は『世界記憶遺産』に違いない。」あるいは、「第2次大戦中、迫害を逃れ、オランダで暮らした日々の記録は間違いなく『世界記憶遺産』だ。」となり、これでは、かえって、元の意味の確実性を阻害し、筆者の顔出しは邪魔になる。そして、後の文に“甚至”をいれると、「人類が後世に伝えるべき史料としてフランスの人権宣言などとすら並ぶ」などとなり、もともと、『アンネの日記』は人権宣言と肩を並べるものと考えている「天声人語」の筆者の考えが、こうして、「ひいていえば」というニュアンスが入り、むしろ人権宣言に劣りを見せる扱いになる。この2語はいずれも蛇足である。

(14) “如此事件”

論述をしやすくするため、原文の5段落目と「訳文」を引用しておく。

こうした事件の発生は、その背景がどうであれ、日本に向けられる世界の視線に深刻な影響を与えるのではないか。それが心配だ。米国のユダヤ人権団体は事件への「衝撃と強い懸念」を語っている

如此事件的发生，无论其背后到底有着何种原因，都将会给全球社会对日本看法带来深刻的影响。如此后果令人担忧。美国的犹太人人权组织对此事件表示“震惊和深切的担忧”。

“如此”は中国語では、「代名詞」として知られている。中国語を学習している学習者にとっては、これは普通副詞的な使い方として知られているだろう。『中日』では、「このように、そのように」と釈義している。要するに、“如此”は普通動詞、形容詞の前に来て、動詞、形容詞を修飾する。しかし、ここでは、“事件”とい

う名詞の前に来て、名詞を修飾する使い方である。これは普通の使い方ではない。

そして、日本語の「こうした」という言葉もある意味では、癖のある言葉である。日本語を勉強する者にとっては、最初はなかなか理解できない言葉である。というのは、これは元々「こうした」という言葉なのに、どうして「こうした」という過去形の形で出てきているのだろう。『日中』には載らない言葉であるが、『大辞林』みたいなより大きな辞書なら見出し語として載っている。『大辞林』では、「このような。こういう。」と釈義している。それでも、「こうした」と「このような」、「こういう」との違いは何だろうか。いずれも上に述べたことを受けての表現であるが、「このような」や「こういう」は、多くの場合、関係事項は1つしかない場合が多い。しかし、「こうした」は普通上記のこと以外にも、例えば、ここの事件も、1つの孤立した事件ではなく、一連の事件という意味がある。したがって、「こうした」は多くの場合、“此类”あるいは“这些”などに訳することができる。

(15) “无论其背后到底有着何种原因”

まず、“无论”の意味用法を見てみよう。『中日大』では、次のように釈義している。

…問わず。…にかかわりなく：疑問詞や選択語句の前に来て、ふつう後に〔都〕〔也〕を置く。

したがって、“无论其背后有着何种原因”だけでも文は十分に意味を伝えることができる。

しかし、「訳文」では、“到底”という副詞を付け加えている。中国語の“到底”は、『現漢』では、次のように釈義している。

(①の記述を省略。) ②副 表示经过种种变化或曲折最后出现某种结果。③副 用在问句里，表示深究。

『中日』も『中日大』もここの③の意味を特に取り上げていないようである。つまり、この“到底”は日本語の「いったい」「はたして」と

同じで、突っ込んで質問するというニュアンスがある。もしこの「訳文」を日本語に戻すなら、「その背景がいったいどうであれ」ということになり、日本語としても変になる。言うまでもなく、中国語としても、普通の言い方ではない。結論から言えば、この“到底”は、到底蛇足である。

(16) “深刻的影响”

日本語の「深刻」に関して、これまでも論じたことがある。簡単に言えば、日本語の「深刻」は「①重大で深く心に刻みつけられるさま。②非常にむごたらしいさま」(『岩波』)という意味で、『日中』では、次のように釈義し、そして中国語の“深刻”について解説している。

1 [心情的に] 严肃。

2 [状況が] 严重；重大。

“深刻”は「(印象・意味・理解などが深い)の意味。

つまり、日本語の「深刻」は重大、むごいという意味なのに対して、中国語の“深刻”は「深い」という意味である。したがって、ここでは、中国語の“深刻”をそのまま使うと、異なる意味になる。

(17) “焚书之举背后”

論述をしやすくするため、原文の最後の段落と「訳文」を引用しておく。

〈本を自由に読むことは犯罪である〉。焚書に及んだナチスの狂気を、長田さんの詩句は突き刺す。いま、「図書館の自由」をなんとかしてでも守らなければならない。

“自由阅读即犯罪”。长田的诗句直指焚书之举背后，纳粹的丧心病狂。如今，无论如何都必须守住“图书馆的自由”。

原文は「焚書に及んだ」であるが、「訳文」では、これを“焚書之举背后”「焚書の行動の背後」と訳している。意識なので、間違いとは言えないかもしれない。しかし、中国語の“背后”は日本語の「背後」とも意味的にはほとん

ど同じで、両語は同義語としてみてもいいかもしれない。もしこの言葉を日本語に戻したら、「焚書の背後」「焚書の裏」となる。こうすると、意味が取れなくなる。

「焚書に及んだ」はどういうような経緯でナチスが焚書ということをしでかしたか、つまり、何がナチスにして焚書という行動に出させたか、その原因、出発点、経緯を問いた다는という意味である。“背后”と訳すと、意味が分からなくなる。

結び

「天声人語」の中国語訳に関して、筆者はいくつかの小文で分析してきた。日本語に関する理解力と、中国語に関する表現力の両方の力が必要であることは言うまでもない。皆様とともに努力していきたい。与大家共勉。

参考文献

- 続三義 (2010) 「日中逐次通訳について——通訳の試験問題から」『アジア文化研究所研究年報』2009年 (第44), 2010年 2月
- (2013) 「日中翻訳——『天声人語』(2012.7.11)の中国語訳を分析する」『日中言語対照研究論集』白帝社 (第15)
- (2014) 日中翻訳について——『天声人語』(2012.6.27)の翻訳例から」『アジア文化研究所研究年報』2013年 (48), 2015年 2月
- (2015) 「日中翻訳について——『天声人語』(2013.1.14)の中国訳から」『日本語教育における日中対照研究・漢字教育研究』, 駿河台出版
- (2017) a 「日中翻訳——『天声人語』(2006.3.10)」『アジア文化研究所研究年報2016年, (51)』263-270, 2017年 2月
- (2017) b 「日中翻訳の心得——『天声人語』の中国語訳を例に」, 『中国言語文化学研究, (第6号)』28-48, 2017年 3月
- (2017) c 「日中翻訳——『天声人語』(2013.3.10)について」, 『高橋弥守彦教授古希記念論文集』, 102-117, 2017年 3月
- (2017) d 「日中翻訳における文脈——『天声人語』の中国語訳から」, 『鈴木泰先生古希記念

論文集], 211-221, 2017年03月

——(2018) [日中翻訳——「天声人語」(2014.3.7)], 『経済論集, 43, (2)』87-100, 2018年3月

续三义 (2000) 《日译汉教学小议——从教学实践谈起》『荒屋勸教授古希記念中国語論集』白帝社

——(2003) 《日汉翻译中的宏观把握》《日语研究》第1輯 商务印书馆 (日语研究编委会)

——(2004) a 《从日译汉角度看日语汉字及汉字词语的认知与表达》《政大日本研究》创刊号 台湾政治大学

——(2004) b 《日汉翻译中时间的认知与表达》《日语研究》第2輯 商务印书馆 (日语研究编委会)

——(2007) 《日译汉时的视角和文脉》《日语研究》第5輯 商务印书馆

——(2013) 《日中翻译——〈天声人語〉(2012.7.29)的汉语译文分析》『アジア文化研究所研究年報』2012年 (47), 2013年2月

——(2015) a 《日汉翻译——〈天声人語〉(2013.5.29)的汉语译文分析》『アジア文化研究所研究年報』2014年 (49), 2015年2月

——(2015) b 《关于日汉两语时间隐喻表达——以〈天声人語〉(2013.1.14)及其汉语译文为例》『日中言語対照研究論集』(17)

——(2015) c 《日汉翻译——以『天声人語』(2009.02.05)为例》『東洋大学・経済論集』(41-1)

——(2017) 《日汉翻译——〈天声人語〉(2015.6.5)》《汉日对比研究论丛, 8》, 255-267, 2017年8月 (辞書類 略)

付録1:「天声人語」原文

「図書館の自由」を守れ

詩人の長田弘 (おさだひろし) さんに「ベルリンの本のない図書館」という作品がある。上からのぞき込むしかないその場所は〈誰も入れない, 地下の, 方形の部屋の, /四面はぜんぶ真っ白な本棚で, /本棚に本は一冊もない。〉
▼図書館は実在する。1933年5月10日, ナチスは2万冊以上という書物を燃やした。非ドイツ的, 退廃的などみなしたマルクス, フロイト, ハイネ, プレヒトラの著作を灰にした。「焚書(ふんしょ)」である。その現場に, 本の受難の記憶をとどめるための不思議な空間がつけられた▼あのナチスの暴挙を思い起こす, という反応が出るのも不思議ではない。『アンネの日記』やそれにかかわる書籍が, 次々と破られている。都内のあちこちの図書館で被害にあったのは300冊以上という。底知れぬ悪意が感じられ, 戦慄(せんりつ)する▼ユダヤ人少女アンネ・フランクの日記は日本でも長く広く読み継がれてきた。第2次大戦中, 迫害を逃れ, オランダで暮らした日々の記録は「世界記憶遺産」だ。人類が後世に伝えるべき史料としてフランスの人権宣言などと並ぶ▼こうした事件の発生は, その背景がどうであれ, 日本に向けられる世界の視線に深刻な影響を与えるのではないか。それが心配だ。米国のユダヤ人権団体は事件への「衝撃と強い懸念」を語っている▼〈本を自由に読むことは犯罪である〉。焚書に及んだナチスの狂気を, 長田さんの詩句は突き刺す。いま, 「図書館の自由」をなんとかしてでも守らなければならない。

付録2：朝日新聞網の「訳文」

守护“图书馆的自由”

诗人长田弘有一篇作品，名为《柏林的无书图书馆》。这个只能从上面俯瞰的空间，是一间“谁都进不去的方形地下房间／四面尽是空白的书架／一本书都没有”。

这是一间真实存在的图书馆。1933年5月10日，纳粹焚烧了2万多册书籍。被认定为非德意志的，颓废的马克思、弗洛伊德、海涅、布莱希特等人的著作全都被付之一炬，此即为“柏林焚书”事件。为记录下当年书籍蒙难的记忆，在焚书的地点上建立起了这样一座奇特的空间。

最近东京发生的一件事也不难让人联想起当年纳粹的暴行。《安妮日记》及有关书籍相继遭到破坏。东京都内多家图书馆里共计300多册书籍被撕毁。这份深不可测的恶意令人战栗。

长期以来，犹太少女安妮·弗兰克的日记在日本也受到广泛阅读。第二次世界大战中为逃避迫害而藏身荷兰的生活记录无疑是一份“世界记忆遗产”。作为应当流传后世的史料，它甚至可与法国的人权宣言比肩。

如此事件的发生，无论其背后到底有着何种原因，都将会给全球社会对日本的想法带来深刻的影响。如此后果令人担忧。美国的犹太人人权组织对此事件表示“震惊和深切的担忧”。

“自由阅读即犯罪”。长田的诗句直指焚书之举背后，纳粹的丧心病狂。如今，无论如何都必须守住“图书馆的自由”。

付録3：続の試訳案

坚守住“图书馆的自由”

诗人长田弘有一篇作品，名为《柏林的无书图书馆》。这个只能从上面俯瞰的空间，是一个“谁都进不去的，地下的，四四方方的房间／四周都是纯白的书架／书架上一本书也没有”。

这是一间真实存在的图书馆。1933年5月10日，纳粹焚烧了2万多册书籍。他们将他们所认定的非德意志的、颓废的马克思、弗洛伊德、海涅、布莱希特等人的著作全都付之一炬，此即“柏林焚书”。为了保留这一书籍蒙难的记忆，在当年焚书的地点建造了这样一个奇特的空间。

最近发生在东京的一系列事件使人自然联想起当年纳粹的暴行。《安妮日记》及相关书籍相继被撕。东京都内多家图书馆里超过300册的书籍惨遭毒手。这一深不可测的恶意（叵测居心）令人战栗。

犹太少女安妮·弗兰克的日记长期以来在日本也一直拥有众多读者。第二次世界大战中为逃避迫害而藏身荷兰的生活记录乃是一份“世界记忆遗产”。作为应当告知后世的史料，它与法国的人权宣言等比肩。

此类事件的发生，无论其背景如何，都将给全球关注日本的视线造成严重的影响。后果令人担忧。美国的犹太人人权组织对此事件表示“震惊和强烈的担忧”。

“自由读书即犯罪”。长田的诗尖锐指出纳粹焚书的丧心病狂。现在，我们务必坚守“图书馆的自由”。

(研究員／経済学部国際経済学科教授)

The Translations of Japanese-Chinese:

the Chinese Translations of the "Vox Populi, Vox Dei" (2014.2.26) as an example

XU Sanyi

Previously, various Chinese translations of the Asahi Shimbun column "Vox Populi, Vox Dei" have been discussed in this publication. This paper compares a May 5, 2014 Chinese translation of a February 26, 2014 Vox Populi, Vox Dei column about library freedoms. It offers a contrastive linguistic analysis of that article. In this paper, terms such as “方形”, “空白”, “无疑”, “甚至”, and phrases such as “此即为‘柏林焚书’事件”, “记录下当年书籍蒙难的记忆”, “在焚书的地点上”, “建立起”, “一座奇特的空间”, “一件事”, “遭到破坏”, “被撕毁”, “这份深不可测的恶意”, “如此事件”, “无论其背后到底有着何种原因”, “深刻的影响”, “焚书之举背后”, as well as passive expressions such as “被认定”, “被付之一炬”, “受到广泛阅读” are examined in depth.